



第1章

# 小さないのちを ささえる薬剤師

超高齢社会の到来、医療費の高騰、AIの発達などの影響で、我が国の医療体系は大きな変革を余儀なくされています。

できるだけ健康を維持し、入院しても短期間で退院して在宅でケアをする体制の整備が求められているのです。

高齢者やがん患者、認知機能に障害のある人々へのケアが喫緊の課題ですが、子どもや赤ちゃんの病気のケアは未開拓の部分も多く、重大な課題です。

ここでは、使用できる薬も限られる子どものケアに焦点を当て、チーム医療における薬剤師の活躍ぶりを取り上げてみます。

(※所属・役職は取材時)





美術館のようにオブジェが並ぶ明るい院内



24時間稼働する注射液抽出装置



子どものための薬をつくる研究室(小児用製剤ラボ)



国立成育医療研究センター

# 小児医療専門病院の 薬剤師

「」の子の体重は1500グラムしかありません。医学と薬物療法の進歩で、多くの子どもを救うことができるようになりましたが、このように小児の治療は小さな体に大きな負担を強いることもあります。このチューブを減らすことができないだろうか。」

国立成育医療研究センターの薬剤部長、石川洋一さんは、小児集中治療室で小さな体にたくさんチューブがついている子どもの写真を手に熱い思いを語る。  
日本で使われている薬の多くが子どもへの使用が認められていないという現実があり、この病院では院内に研究室を設置し、子どものための薬をつくり出すことにも取り組んでいる。  
「小さな子どもたちを助けた

めには、もつともつと小児のための薬が必要です。しかし、新生児や小さな子どもたちに安全に使える薬はまだ少ないのです。薬の形は、薬の効果を十分に引き出し、安全に使用するために決まっているものですから、錠剤が飲めなければ砕いて粉にすればよいとはいきません。薬の効果と安全性を保ちながら形を変える必要があります。薬剤師は、薬の化学構造、物理化学的性質、体内動態、作用・副作用情報などを総動員して対処します。ここではまさに使命感に加え、倫理観、責任感が求められ緊張します。このような現場の薬剤師の工夫と努力が、小さな子どもたちにたくさん薬を提供し、痛みのない、副作用のない薬の世界を作ることができればと日々頑張っています。」  
石川さんたちは、さらに、子どもに使っても安全だと確認できた薬について、多くの子どもたちに使ってもらったための治験を全国の小児科病院と連携して行っている。製薬企業にデータを提供して「こういう薬が欲しい」と製造を依頼することもある。

※治験：くすりの候補品を使って国(厚生労働省)の承認を得るために行う臨床試験。

## セーフティネットという 薬剤師の重要な役割

**数** 百人の医師と薬剤師に対して、腎機能障害のある患者さんへの安全な投薬に関する調査を行い、論文を発表した医師、石倉健司さん(同病院の腎臓・リウマチ・膠原病科の医長)は、その結果を次のように話してくれた。

「みごとに医師の得意な分野と薬剤師の得意な分野に分かれまして。医師は臓器の機能については得意分野です。しかし、薬の毒性や体内動態は不得意です。『この薬は腎臓から排出されるので腎機能の悪い患者さんには使用できません』といった、医師には足りない知識や情報を薬剤師から提供してもらいます。薬のスペシャリストである薬剤師は頼りになる存在なのです。」

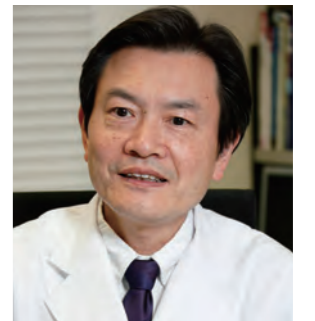
病院では、治療に関わるさまざま



小児集中治療室で治療を受けている赤ちゃん



たくま りえ  
詫間 梨恵さん  
国立成育医療研究センター  
薬剤部



いしかわ よういち  
石川 洋一さん  
国立成育医療研究センター  
薬剤部長







詫間さんは、自身も母親となり、より一層お母さんたちの気持ちがわかるようになったと話してくれた



医師や看護師からの問い合わせにも薬学の専門家として責任を持って対応する

「薬の適切な選択、投与量や投与タイミングについて、特に子どもに関しては未解明の部分が多いです。医療において最も大切なものは安全です。薬剤師は、医療安全の要、セーフティネットという重要な役割を担って来ています」と石倉さん。

「薬の適切な選択、投与量や投与タイミングについて、特に子どもに関しては未解明の部分が多いです。医療において最も大切なものは安全です。薬剤師は、医療安全の要、セーフティネットという重要な役割を担って来ています」と石倉さん。

## 医師や看護師と共に 最善の医療を目指す



常に患者のためにさまざまな職種のプロフェッショナルがチームを組み最善の治療を目指す

「錠剤やカプセルなど、大人には飲むのが難しい薬がありま

すが、子どもは飲めません。直接、子どもに訊ねたり、医師や看護師の意見を聞いたりして、どうしたらより飲みやすくなるかを考え、

院内の研究室で小さな錠剤を作ったこともあります。小学生くらいになると、薬を飲んでも体調が変わらないからと薬を飲まなくなってしまう子どももいます。そのよ

うな時には、なぜ薬を飲まなければいけないのかを、イラストを使うなど、子どもにもわかるように説明します」と話してくれたのは、腎臓科を担当する薬剤師の詫間梨恵さん。大きなカプセルを1回に10個も飲んだり、砂のようにジャ

リジャリした薬を大量に飲んだりしなければならぬ子どもを担当した経験がある。

そんな詫間さん、担当していた子どもが大きくなり大学受験の際に『薬剤師を目指したい』と相談されたことがあり、うれしい思い出になっていくそう。石川さんも、退院して大きく成長した子に会うと『この子の未来をつくることに協力できたんだと思えて、とてもうれしい』と語る。

### 薬剤師は薬物治療のパートナー



やまぐち いくこ  
山口 育子氏  
認定NPO法人  
ささえあい医療人権センターCOML  
理事長

薬剤師は薬物治療を受ける患者のパートナーであり、強力なサポーターでなければなりません。患者に伝わる言葉で話ができ、コミュニケーションのとれる「この人に相談したい」と思える人間的な魅力のある薬剤師が増えることを期待しています。



# 在宅医療の在り方に 果敢に挑戦

**重** 篤な状態を脱して退院した後、自宅に帰り、病院に通いながら治療を続ける子どももたくさんいる。そのような子どもたちをささえるのが、薬局の薬剤師だ。

国立成育医療研究センターの近くにあるココカラファイン薬局砧店に、川名三知代さんを訪ねた。

チノパンにカーデイガン姿の川名さん。「いつ呼ばれても出かけられるように、このような格好です。早朝や夜遅くであっても緊急の事態には出勤し、薬や点滴の手配、患者さんやご家族の精神的支援もします。私が担当する患者さんの中には、緊急に特別な薬や点滴が必要なケースがあります。残念ながら適切な薬やキットがない場合は、試行錯誤しながら工夫をこらし、薬剤師としての覚悟を決めて要望に応えるようにしています。」



川名 三知代さん  
ココカラファイン薬局砧店

川名さんは、声がかかれば必ず患者が退院する際に病院で行われるカンファレンスに出席し、担当医や薬剤師、看護師と患者情報を共有している。病院や薬局という枠組を越えたこのような活動が、小児在宅医療を安全かつ円滑に推進することに繋がっており、それを学術論文として発表することで地域医療に貢献したいと語ってくれた。

## 薬学の専門知識を

### 現場で生かす

**川** 名さんは、家庭での生活を見て困っていることを見つけ、かかりつけの病院と相

談して対処法を提案し、患者や家族を支援する。  
「薬の管理者となるお母さん

## 臨床現場での研究推進が大切



ながい りょうぞう  
永井 良三氏  
自治医科大学 学長  
元東京大学医学部附属病院 院長

医療現場には、さまざまな価値観や経験があります。そうした暗黙知と言われるようなものは、誰にもわかる情報として確立していないものも多く、それを書き出して共有していく。これもサイエンスであり研究です。

たちに働きかけて、薬を子どもにきちんと使ってもらうことも薬剤師の役割です。」

「どうしてこんなにたくさん薬を使わなければいけないのか…」、薬に対して不安を抱くお母さんは少なくない。

「薬の種類が多いけれど無駄な薬は一つもないことを、薬の効く仕組みを丁寧にわかりやすく説明してわかっていただきました。その結果、薬の投与に前向

きになってくださいました」と川名さん。

とつさにこうしたわかりやすい説明ができるのは、処方箋を見ただけで頭の中に薬の化学構造が浮かび、それが体の中でのように運ばれ、どのようにターゲットに届き、作用し、そして代謝されるかのイメージが見えているからだ。これこそが、薬学を専門に学び、得た知識を現場で生かすことができる薬剤師のチカラだ。

考えています。たとえ担当医や受診する病院が変わっても、薬剤師は常に変わらずに患者さんを見ていくことができます。在宅医療の現場では、街全体が病棟で、薬剤師や訪問看護師が、病室を訪ねるようにご自宅を訪ねているのです。」

長く続く治療に、地域の薬局の薬剤師だからこそ可能な寄り添い方があふれる。先天的な病気の子どもの持つお母さんは、「健康に生んであげられなかった」と一人で責任を背負い込み、心を閉ざしている人も少なくない。そんなお母さんに対して川名さんは、「何年もかけて少しずつ相手の想いを理解していくと、いつでも相談してもらえようような信頼関係を築くことができるんです」とうれしそうに語る。病院を出て自宅に帰ってからも長く続く治療の中で、川名さんに勇気づけられている親子が大勢いるであろうことが想像できる、そんな笑顔だった。

薬剤師は、今日も小さいのちを守るため、プロフェSSIONナルとして、患者一人ひとりに寄り添い、患者と家族をささえている。



「お母さんと一緒にその子の薬の”物語”を整理しさをさえるのが私の仕事」と川名さんは言う

## 地域に根差す薬局だから できること

**小** 児科の治療を受けている子どもたちの中には、病気が完治しないまま成人し、小児科の領域から離脱してしまい、責任をもって治療にあたる者がい

なくなることもあります。小児科の医師は小児の病気の治療に関する専門家ですが、薬剤師は全ての診療科の薬に関わるので、小児から成人への橋渡し役にもなれると